

地域資産継承としての高野口小学校改修における一連の活動

正会員 本 多 友 常 君

正会員 神 吉 紀世子 君

正会員 手 嶋 尚 人 君

正会員 鳴 海 祥 博 君

正会員 平 田 隆 行 君

NPO 法人 環境創造サポートセンター 殿

和歌山県橋本市の高野口小学校は、1937年に建設された木造平屋建ての現役の建物である。校舎は、中央に正面玄関のある長さ98mの正面棟を持ち、これに楯の歯状に4本の教室棟が接続され、延床面積は約3,500㎡で19の教室ほかを持ち、雄大な外観である。歴史を感じさせる街並みを抜けると、ウバメガシが植わる石垣を巡らした校舎に至り、門を入ると式台構えを思わせる近代和風スタイルの正面玄関が迎え、歴史のある地区の中でシンボリックな建物となっている。本校舎は現在、橋本市指定文化財となっている。

校舎改修への動きは、1996年、阪神・淡路大震災の惨状を目にした同校PTAが建替え要望書を提出したことにはじまる。町議会は直ちに建替えを決議したが、間をおかず、保存を目指す住民意見も大きくなり、本賞の対象者を中心とした専門家グループの参加を得て、建替えか改修かに関する合意形成の努力が重ねられ、町議会の保存利活用の方針承認を得て、2005年度末に改修実施設計が完了した。年度明けの当初に市町合併があり、新市の教育委員会との間に齟齬が生じたが、これが克服され、2009年に最終設計が完了し、2011年の竣工にこぎつけた。この間、詳細設計図書が3度書き直されている。

本業績の評価は総合的なものであるが、なかでも以下の点を特記しておきたい。

(1) 改修・継続利用が、教育環境づくりとまちづくりの両観点から望ましいことを理解してもらうための合意形成活動を、シンポジウムやワークショップの開催など適切な場と的確な資料を提供しつつ、長期にわたり繰り返し行ったこと。この過程で生み出されたツールの一つが校舎評価のダイヤグラムで、これによれば、残したい場所が正面玄関や廊下、周囲の石垣と生垣であり、新しくつくり変えたい場所がトイレと図書室に集中していることが一目瞭然で、利用者参加による建物評価ツールとしてユニークである。

(2) 耐震性能や環境的な水準の確保、施工費用の低廉化を検討する上で、各々の検討課題に適切な資料と施工方針を示し、望ましい改修方針を検討したこと。例示すれば、普通教室の照度確保のための天井白色化要求を、天井直下に一回り狭く白色ボードを吊り、竿縁天井を見える形で残すことで解決している。また、載荷実験等による耐震診断に基づき、一部鉄板を埋め込んだ木製格子等を用い、既存躯体を残した耐震補強を実現している。

(3) 設計は保存ではなく継続利用を目指したが、将来における元建物の再現性を保持するために、取り替えた古い部材も可能な限り収納・保存したこと。例示すれば、竣工当時から残っていた窓ガラスは中庭に面して用い、一方、外側に面する窓は強化ガラスの新しい木製建具とし、取り替えた古い建具はすべて小屋裏に保存している。

耐震や環境的な性能が低く評価されている場合、建物の歴史的あるいは地域資産として

の価値を見出し、保存・継承利用への合意を得るのは容易ではない。まして子供たちが日々学ぶ校舎であれば、教育関係者や保護者たちは性能を高めたい、そのためには建替えをしたいという意向が強く働く。保存・継承か建替えかの意向の溝に、上に示したような努力と工夫を重ね、10年以上の年月をかけて橋を渡し、従前の姿を可能な限り残しつつ改修するという解決を得た本業績は、将来生じうる同種の課題に大きな示唆を与えるものである。

以上のように、本業績は、継承される建築を目指す設計理念とそれを具体化する合意形成への支援活動が結実した優れた業績であり、その成果として、ふるさとの温かさを持ち、地域の人びとが誇りに思う学び舎と歴史的環境の保全が実現している。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。